
改版：黒髪少女の終末記 ~ cross & end ~

汀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

改版：黒髪少女の終末記 c r o s s & e n d

【Nコード】

N 5 7 3 7 A

【作者名】

汀

【あらすじ】

オリキヤラ分多め、汀の『イロ者少年少女シリーズ』。現在大幅改稿中です。

序章 独白

私の名前は、浦上千恵^{うつらかみちえ}。

『黒の組織』のメンバーで……組織が壊滅した時、13歳だった。

私の父親は殺し屋で、ウォッカというコードネームだった。本名は私も知らない。

私自身のコードネームは、無い。15歳になったらもらえるはずだったけど。

私は、組織が壊滅した2週間後、あっけなく死んだ。

私は皆さんに、私を見た、『黒の組織の終末』と、

『私自身の終末』をお話しようと思う。

そして、だからこそ……これから、私を『ユーリア』と呼んで欲しい。

……この名は、組織の壊滅後も捕まらなかった幹部が新たに立ち上げた犯罪組織で、私が貰った通り名だ。

私は戸籍も無く、流れるにその組織に入った。

そして……

死んだ。

私が話すのは、黒の組織壊滅2ヶ月前から、壊滅2週間後にかけての私の体験。

繰り返すけど……
組織と、私の『終末』を皆さんにお話しようと思う。

序章 独白（後書き）

～作者より～

CNRで連載していた小説の改版、3作品目がやっと投稿出来ました。

PCからアクセスされている方は分かると思いますが、小説のレイアウトなど結構冒険しているところがあります。

読みやすい、読みにくいなど、何かしら意見を書いていただければ幸いです。

第1章 蹴撃 第1節

1月5日 午後11時

一見、何の変哲もない建物でありながら、だが周辺の道路をよく観察できる場所に、そのマンションは建っていた。

そして、正月明けの寒さの中、そのマンションの一室を目指す、一人の男がいた。

彼はオートロックを通過し、エレベーターを上り、廊下をややゆっくりと進む。

彼の衣服は黒ずくめで、しかも黒いサングラスをかけていて、体格は大柄だった。

まるで裏社会の人間のような格好で、しかし彼の動作に切れ者のようなオーラはない。

ただ、彼の動きには、何度も同じ動作をしたことによる、馴れがあった。

それは、当然ではあった。

彼はこのマンションの住人なのだから。

彼はいつもの通り自分の部屋の前で立ち止まり、鍵を出しノブを掴み……

一瞬後、突然の掛け声と気迫が、彼を圧倒した。

「であーっ!」

……扉を開けた途端、そんな掛け声と一緒に回し蹴りをかまされた時。

人は、どう反応するだろうか？

「……!」

『黒の組織』実働部隊所属、本名不詳の構成員ウオツカの場合。
よけきれずに横っ腹に見事な蹴りを食らい……そこを押さえてうずくまった。

「てめ……何すんだ！ 千恵!」

怒りのウオツカの声に答えるのは、冷やかな少女の声。

「自分の娘の誕生日忘れた、だらしない男への怒りの一撃。
……ちなみにここの鍵は、ジン様にお借りしました」

……話がややこしくならない内に言っておこう。

これは、組織から割り当てられたマンションの一室、ウオツカの部屋。

その入り口付近での出来事である。

そしてここの鍵を所持しているのは、ウオツカと上司であるジン。
そして組織のボスの3人だけであった。

ウオツカに回し蹴りをかました少女の名は浦上千恵。きのう13歳になったばかり。

一応ウオツカの娘であり、コードは無いが立派な『黒の組織』の構成員だ。

第1章 蹴撃 第1節（後書き）

（作者より）

この節、前半部分は加筆部分です。

規定で、600字以上ないと投稿が出来ませんので書き足しました。

それにしても、ウォツカをこんな風に蹴れる人って、黒の組織に何人いるんだろう……

第1章 蹴撃 第2節

1月6日 午前1時

「H A H A H A H A …… それは傑作ね！」

ベルモットの笑い声が周囲に響く中。

ウオツカはこの女に、先ほどの回し蹴り事件を話したことを少し後悔した。

ここは、とある酒場のカウンター。

ウオツカとジン、ベルモットの3人が並んで座っている。

ウオツカはあの後さんざん実の娘に愚痴を言われた。

その娘も帰宅した後、ウオツカは、ジンがベルモットとここにいてることを思い出し、ある質問をジンにするために酒場に來たのだった。

その質問とは。

「……兄貴、いつ千恵に俺の部屋の鍵を渡したんですかい？」

ウオツカの問いに、ジンはさらりと言った。

「今朝、仕事が終わってすぐだ。

『自分の一人娘の誕生日を忘れた不甲斐ない父親に怒りの一撃を浴びせたので、父の部屋の鍵を貸してください』

と言われてな」

ごん。

「兄貴……」

音を立ててカウンターのテーブルに突っ伏したウォッカは、小さく呻く。

その直後。

外国人の女の笑い声が酒場中に響いたという情報があるが、真相は不明である。

同刻。別の場所。

「……笑える話だねー。それは」

「ええ」

かなり高いキュートボイスの娘の声に、千恵は頷いた。

ここは、千恵が所属する『黒の組織』の実働部隊、『チーム・ベアー』のアジトの洗面所。

千恵と話をしているこの娘の名は、ルシンダ・マクワイルド。5月27日生まれ、15歳。

千恵と同じく『チーム・ベアー』のメンバーで、そして千恵のルームメイトだ。

現在、『チーム・ベアー』には千恵を含め、5名の未成年メンバ

ーがいる。

当然5名とも保護者が実働部隊所属で、文字通り『黒の組織で育った子供たち』。

彼らは皆、まるで学校の寮のような2人部屋を、組織の上層部から割り当てられている。

「でもおじさんが、よく鍵を貸してくれたね……」

千恵は再び頷いた。

「ジン様には、何のために使うか、正直に話したから」

「……でもホント、ウォツカに堂々と回し蹴りできるのって、千恵ちゃんだけだよ……」

「実の娘ですからね。」

でもそれなら、ジン様をおじさん呼ばわりできるのはルシンダだけ……」

「実のメイですからね」

ルシンダは、歯ブラシ片手に微笑んだ。

確かにジンを『おじさん』と呼べるのは、ジンの実の姪^{めい}、ルシンダだけの特権だろう。

低めの身長に青い瞳。短く、癖の強い金髪。左の後れ毛はくるりとカールしている。

……とにかくルシンダは、おじに全く似ていないのだ。

第1章 蹴撃 第2節（後書き）

～作者より～

こんにちは。

何かのバグだと思うのですが、小説の行間設定が反映されていないことに、今日気付いた汀です。（汗）

色々考えたのですが、とりあえずこのままにしておくことにしました。

今の方が読みやすいようですし。

ところで、『チーム・ベアー』の未成年メンバーは5人。

全員が2人部屋だと計算が合わないわけですが、その種明かしは次の節で明らかにします。

第1章 蹴撃 第3節

1月6日 午前10時

ジンは、黒の組織本部アジトの廊下を歩いていた。

彼の周囲、普通のオフィスのような廊下を、色々と物騒な印象を与えかねない者達が歩いている。

無論、黒づくめの格好をしているジンも、そんな者達の一員だ。

もちろん、ジンは用もなくアジトを歩き回ったりはしない。

ジンは、組織のボス、通称『あの方』に呼び出された後、帰る途中だった。

「ジン様」

自分と呼ぶ声に、ジンは振り向いた。

見れば、白いTシャツ・半ズボンに、ごついアサルトブーツという格好の千恵が立っている。

「……格闘術の訓練をしていたのか？」

ジンの質問に千恵はうなずいた。

「ええ。今日はもう終了したんですけどね」

……考えてみれば、当然のことだ。

千恵の所属している『チーム・ベアー』の未成年メンバーは、皆、

格闘術を叩き込まれている。

半ば興奮した口調で、千恵は言った。

「いつも、訓練がすごいですよ……」。

今日はルシンダが特にすごかった。

たまたま様子を見に来たコルンさんを、ルシンダが思いっきり蹴っちゃって。

蹴りがコルンさんの右足に激突して……」

……足を押さえて無言でしゃがんでいるコルンと、かなり慌てているルシンダの様子が目に浮かんた。

「……大丈夫なのか？ 蹴られたほうは」

「コルンさん、医務室に運ばれていましたけど」

「そうか……」

ジンの呟きに、千恵は少し笑って、言った。

「まあ、『チーム・ベア』の未成年メンバーは、格闘技が強くて有名ですからね。」

……みんなが成人したら、どうなるんでしょうね」

「……未成年メンバーの性別と、現在の年齢は？」

「え……？ えーっと……」

ジンの問いに目を丸くした千恵は、しかしすぐに気を取り直し、指を折りながら数え始めた。

「現在16歳の女性が、1人。
現在15歳の女性が、1人。……これがルシンダですね。
私は13歳になったばかりで……
そして、10歳の男の子と女の子が、1人ずつ。
以上、未成年メンバーは5名。
あ、あと成人の男性が1人、私達の世話役をやってます」

「その合計6人で、アジトで生活してるのか？」

「ええ。」

ちようど2人部屋を3つ、上層部から割り当てられてますから」

……千恵の頭の中には、5名のメンバー全員の顔が、浮かんでいくのだろう。

だがジンは、ルシンダと千恵以外の未成年メンバーの顔を、知らない。

ジンの実の姪、ルシンダの様子を見ることを口実に、顔を知る機会には作れないでもない。

しかし一方で、10歳のガキの顔を知る事が得になるとも思えない。

話が脱線したことに気付き、千恵は思い出したように言った。

「ジン様、うちの父の部屋の鍵を借りたままだったから、お返しします。」

しばらく私が使う機会、無いでしょうから」

千恵は自分の半ズボンのポケットに手をつ込み、鍵を取り出す。

昨日、ジンが千恵に貸した、ウォッカの部屋の鍵だ。

鍵をこちらに向ける千恵。

それを見てジンは少し考え込み、やがて言った。

「浦上千恵。その鍵はお前が持っている」

「えっ……？」

千恵は小さく声を上げた。

ジンの真意を測りかねているのか、ハッキリとした疑問が彼女の顔に浮かぶ。

ジンは、言った。

「浦上千恵。その鍵はお前に預ける。

ただ、絶対に無くさないようにしろ。

俺が、その鍵を使う時……その時は、返して欲しい」

千恵は目を瞬いた。

一瞬ポカンとし、そして……

いたずらっ子のような笑みで、頷いた。

第1章 蹴撃 第3節（後書き）

（作者より）

『チーム・ベア』の人数、種明かしの節。

……つまり、未成年5人＋世話役1人の6人が、2人部屋を3つずつ使っているというわけです。

一応、アジトの部屋割りの設定を書いております。

2人部屋A：千恵とルシンダ

2人部屋B：16歳の女性と10歳の女の子

2人部屋C：世話役と10歳の男の子

次回の節、千恵の逆襲の始まりです。

第1章 蹴撃 最終節

1月6日 午後10時

夜の10時にもなると、酒場のような場所では、子供の姿が完全に消える。

もしかしたら年齢を誤魔化した未成年もいるかもしれないが……少なくとも、見た目に明らかなガキは存在しない。

黒の組織の構成員ばかりのこの酒場も、その例には漏れない。この時間のこの場所において、存在する者は皆、大人だ。

「アニキ……」

憔悴したウォッカの呼び声が、酒場中に響き渡った。

カウンターで座っていたジンとベルモットは、同時に入り口の方を振り向く。

見ると、開け放たれた酒場の入り口から、疲れた様子のウォッカが歩み寄ってきた。

「……何かあったのか？」

普通ではないウォッカの様子を見て、ジンは言った。

ウォツカは無言で、ジンの隣に座る。

何秒か迷った後、彼は驚くべきことを告げた。

「誰かが留守中に俺の部屋に入って、部屋をいじくり回した痕跡があつて……」

ウォツカの言葉の語尾が終わらぬうちに、ベルモットは質問した。

「……えっ？ あなたの部屋の鍵、管理しているのは誰？」

この質問が愚問だというのは、ベルモット本人にも分かっている。構成員の部屋の鍵を所持するのは、構成員本人とその上司、そして組織のボスの『あの方』の三人。

つまりウォツカの部屋の場合、ウォツカとジンと『あの方』が、鍵を所持しているわけだ。

構成員の部屋のセキュリティは万全だ。鍵が無ければ侵入できない。

つまり、鍵が手に入らない限り、部屋をいじくり回すことは出来ないのだ。

もちろん、鍵が外部の人間の手に渡る可能性は、かなり低い。しかし……

「アニキ」

「……何だ？」

「アニキが千恵に貸した部屋の鍵、千恵は返したんですかい？」

ジンはうなずいた。そして、

「今日、アジトの廊下で、浦上千恵本人が俺に声を掛けてきた。その時、部屋の鍵は俺に返却された」

……その時、返却された鍵を再び千恵に貸したのだが、もちろんそれは秘密だ。

「……ウォツカ。

部屋の、どんなところがいじられていた？」

ジンの静かな質問に、ウォツカは一度頭を掻いた。

「冷蔵庫のペットボトルのウーロン茶の中に、トウガラシの粉末が大量に入っていて……

慌てて調べると、TVがひっくり返っていて、

他にも、ベランダに干していた洗濯物が水浸しになって、ちゃぶ台に置いてあったり……」

「……？」

ベルモットは首をかしげた。

話を聞く限り、これはいじられたと言うよりも、嫌がらせにあったと言った方が正しい。

数分後。

トイレに行く部下の背中を見ながら、ジンは呟いた。

「……千恵だな」

「……えっ？」

隣席のベルモットの声に、彼は口の端を少しだけ歪める。

「誕生日を忘れられて怒ったらしい。」

……ひととおり暴れたようだな、父親の部屋で」

とりあえず明日、貸した鍵を回収しようと考えつつ、彼は静かにカクテルを飲み干した。

どんな場所でも、日常は過ぎていく。

色々な事件や騒ぎを交えつつ、黒の組織の日常は過ぎていく。

日常の時間は、ただ、過ぎていく。

第1章 蹴撃 最終節（後書き）

（作者より）

本日三度目の投稿。この節が最終節です。

千恵がウォッカの部屋に忍び込むシーンを描写しようか迷ったのですが、描写が無くても話は通じるので大丈夫だろうと判断しました。

とりあえずCNRの旧版に掲載していたのは第3節までなので、これを投稿した後、管理人さんに旧版の削除をお願いすることになると思います。

なお、他の作品の執筆のため、次回の投稿は6月になる予定です。御了承ください。

第2章 仲間 第1節

1月8日 午前9時30分

その廊下は、いたって普通だった。

何の変哲も無い高層ビルのオフィスの廊下だと、大抵の人間は思うだろう。

……あくまで見た目は、だが。

廊下は普通であっても、その廊下を歩く者達は普通ではなかった。黒ばかりが目立つ服。

冷たいか、もしくは伏せられた目線。

殺伐とした雰囲気。

ある意味、当然ではあった。

ここは、黒の組織本部アジトの廊下なのだから。

しかし、どんな場所にも場違いな者は存在する。

こんな廊下をオドオドと進む10代の少女2人組など……

『場違い』以外に、彼らを表すふさわしい言葉はあるだろうか？

「千恵ちゃん」

周囲の冷たい視線を強く感じつつ、右目に黒い眼帯を着けた三つ編みの少女が、もう片方の黒髪の少女を呼んだ。

「何でしょう？ 綾さん」

名を呼ばれた少女は、硬直した笑みを浮かべ、たずねる。
綾さんと呼ばれた眼帯の少女は、同じような顔で言った。

「私達、迷ってない？」

「……多分、迷っていると思います」

ハハハ、と、2人は乾いた声で笑い合った。

眼帯を付けた少女の名は、むったかあやの六鷹綾乃。10月18日生まれ、16歳。

黒髪の少女の名は、浦上千恵。先日13歳になったばかり。

無茶苦茶気まずい雰囲気の中、『チーム・ベアー』所属の2人は立ちつくしていた。

「医務室、どこなんだろう？」

「さあ、どこなんでしょうね？」

……事の発端は一日、1月6日の格闘技訓練だった。

彼女達と同じ『チーム・ベアー』未成年メンバーであるルシンダが、

格闘技訓練の様子を見に来たコルンの足を、誤って蹴ってしまったのだ。

コルンは医務室に運ばれ、そこで足の脱臼しているとの診断を受けた。

医務室は構成員の入院施設を兼ねており、現在彼はそこに入院中だ。

自分達の仲間が引き起こした事故。

千恵が、コルンの見舞いを思いついたのは今日の朝だった。

いつもならば今の時間帯は、格闘技訓練を受けなければならない。だが、今日の訓練は、今朝になって世話役から中止と告げられたのだ。

（ちなみに千恵は他の『チーム・ベアー』の未成年メンバーを見舞いに誘ったが、それに応じたのはヒマな綾乃だけだった）

本来の『チーム・ベアー』の仕事は、アジトに侵入した外敵の排除だ。

当然、アジトの構造に詳しくなければならぬのだが……

あいにく未成年メンバーの担当区域は、さほど重要ではないアジトの下層階。

医務室などがある上層階は、訪れたことが無かったのだ。

「軽はずみに来るべきじゃありませんでしたね……」

「確かに……」

そもそも、『誰かに場所を尋ねよう』と考えている時点で、甘い。2人の周りを歩く者達に、そんなことが出来そうなものは一人も

いないのだ。

第2章 仲間 第1節（後書き）

（作者より）

6月に更新予定でしたが、私の都合により1日早めました。
この節、『チーム・ベアー』の仲間たちがドバドバ出てくる予定
です。

第2章 仲間 第2節

1月8日 午前9時32分

その日、ベルモットがその階を歩いていたのは、ただの偶然だった。

そこそこ仲が良好な仲間に見舞いに、医務室に向かうという用事。ヒマな時間は他にもあつて、ただ何となくこの時間に見舞いに行く決めただけ。

エレベーターから降りた後、歩いて医務室へと向かう。

廊下を歩く人間の数は多いものの、雰囲気はいつも通りの殺風景。空気がキツイのはいつものことで、ベルモットも適当に馴染みながら廊下を進む。

……が。

「……」

廊下で立ちつくしている2人の少女を見、ベルモットの足は止まった。

何があつたのかは分からないが、とにかくみじめそうなオーラに、ベルモットは強く眉をひそめる。

もし2人が見知らぬ少女だったら、ベルモットは無視しただろう。しかし2人のうち片方の少女は、ベルモットとは面識があつた。

……ため息をつきながら、ベルモットは彼女らのそばに歩み寄る。そのすぐ後、こちらが声をかける前に、面識があるほうの少女が

気づいた。

「……………」

あー、ベルモットさん！
助けてもらえませんか？」

懇願する少女……浦上千恵の、表情と言葉。

すがりつく、という形容詞をそのまま表すような態度に、ベルモットはあきれ返った。

「……………」
「……いったい何があったの？」

感情を隠さないその質問に、千恵は肩をすくめつつも言った。

「綾さんと一緒に医務室に行こうと思って、でも建物の中で迷っちゃって……………」

「迷った？
行き方の確認はしなかったの？」

千恵ではない、綾さんと呼ばれた少女（ベルモットとは面識の無い、右目に眼帯を着けた子だ）が、小さくうめく。
ベルモットはイラつき、更に問うた。

「……………」
「……なぜ返事をしないのかしら？」

千恵は慌てた。

顔を上げてオドオドと、

「す、すいません、確認はしてないです。
見通しが甘くて……」

「このアジトの上層階の構造、TV局並みに複雑なのを知っているの？」

少女2人は共にに首を横に振った。

ベルモットはまたしてもあきれ、しかし気を取り直して言う。

「あなた達は2人とも、『チーム・ベアー』の未成年部隊の所属よね？」

「ええ、そうですけど」

「浦上千恵さんと、……もう1人のお名前は何かしら？
見たところ、千恵さんよりも年上のようにだけど？」

千恵の横に立っていた眼帯の少女は、意外な質問に一瞬うろたえた。

しかしどうにか我に返り、言う。

「六鷹綾乃、16歳です」

「そう。

むったか、あやのさんね……」

「はい」

「分かったわ。」

私も医務室に向かう途中だから、ついてきて」

「……！」

ありがとうございます！」

千恵は、目を輝かせた。

第2章 仲間 第2節（後書き）

（作者より）

お久しぶりです。汀です。

前回の更新から、何と一ヶ月が過ぎていました。（汗）

そもそも原稿データが飛んだ時点でPCの不調に気づくべきなのに、それを見逃し本格的にPCが故障。

直後、テスト期間に突入した最悪な状況だったわけですが。（PCが復旧した以上、今後しばらくはこんなことがないと思いたいです）

ちなみに他の物語でも、オリキャラの六鷹綾乃は登場しています。この終末記とは大きく違う性格なのですが、色々考えていただければ嬉しいです。

投稿後追記：句読点のミス、修正しました。

本文の内容自体は一切変わりません。

第2章 仲間 第3節

1月8日 午前9時37分

黒の組織のアジトの廊下を進む、3人の人間がいる。

内、1人は慣れた感じの外国人の女だが、2人はいかにも場違いな少女。

ベルモットと、六鷹綾乃、浦上千恵だ。

彼女たちはアジト内の医務室へ向かい、……そして困惑した。

「……コルンさん、もう退院されたんですか!？」

千恵の驚きの声が、結構広い医務室の受付に響いた。

困った様子で返答するのは、白衣を身にまとった医務室の受付担当だ。

「ええ。……医者が引きとめているのに、きのう無理矢理退院されたんです」

「「「……」」」

3人は思わず無言で顔を見合わせ、だがすぐにベルモットは受付に問う。

「何故退院したのかしら？」

「……分かる？」

明らかに幹部だと一目で分かるベルモットの、問い。
若い受付は背筋を伸ばして答えた。

「ええ。実は……」

きのう、キャンティさんがお見舞いに来て、その時コルンさんをはからかったらしいんです」

「……からかった？」

「それで、何を言われたのかは分からないんですけど……、
コルンさんは、顔を真っ赤にして病室から出て行きました」

「そういう言いかたってことは、あなたは現場を目撃していたの？」

「ええ。」

自分は、医者と一緒にコルンさんを引き止めたから」

「……ナルホド、とベルモットは思った。

コルンの性格を細かく知っているわけではないが、これは十分に
ありえる話だとも思う。

コルンがいない以上、3人が医務室にいる意味は無い。
アジトのビルの下層に戻ろうとするのも当然のこと。

だが彼女達は、その途中で思わぬ人物に会ったのだ。

……松葉杖をついた、コルンである。

第2章 仲間 第3節（後書き）

（作者より）

こんにちは、汀です。

後書きの投稿が遅れて申し訳ありません。

本文は執筆時間約20分であわただしい投稿となったわけですが、あとから読んでちよつと変だと思ったところは直しを入れていきます。

ところで、8月2日の小説アクセス数がなぜか急に増えているのですが、理由をご存知の方はいらっしゃいませんか？

この小説と、水色少女の物語です。

8月24日追記：後書き修正しました。

第2章 仲間 第4節

1月8日 午前9時42分

黒の組織アジトのビル、上層階のエレベーター前。
浦上千恵は、六鷹綾乃と共に硬直していた。

この日、どうしてやたら困る状況が2度もやってくるのか、彼女は本当に疑問に思う。

千恵の目の前、松葉杖をついたコルンと、そのコルンを助けるように立つ少女がいるのだ。

この少女が赤の他人ならば、たぶんコルンの娘かと思ってスルーしたことだろう。

だが、この少女はコルンの娘なんかではないと千恵は知っている。

少女の名は、かざしめくひ風代桜。4月4日生まれ、現在10歳。
千恵と同じ、『チーム・ベアー』の未成年メンバーだ。

「……桜ちゃん、なんでこんな所にいるの？」

我に帰った千恵の問いに、桜は素直に答えた。

「かなで兄さんに頼まりました」

かなで、というのは『チーム・ベアー』未成年メンバーの世話役

の名。

「何を頼んだの？」

「『コルンさんと一緒に医務室に行ってくれ』って」

「……何で、そんなこと頼んだんだろ？」

末端の人と上層部のかたを、一緒に行動させるなんて……」

もし千恵が世話役にそんな事を頼まれていたら、絶対、対応に困るだろう。

見舞いに行くのは『チーム・ベアー』メンバーとして、義務心からの行動だ、と説明出来るが、

一緒に医務室に行く、というのはそういう説明で通用する行動ではない。

ウオツカならともかく、コルンは未成年メンバーとそう親しいわけでもない。

先日、未成年メンバーの格闘術訓練にコルンが姿を現したのは、実は珍しいことなのだ。

「千恵さん、コルンさんのお見舞いに行っただけですよ？」

「うん」

「コルンさん、お医者さんに止められたのに退院しちゃいました」

「そうだね」

「コルンさん、『あの方』にすごく怒られたらしいんです」

「…………へ？」

「だからコルンさん、今から医務室に戻るんです」

「…………そうなんだ」

「…………で、医務室に行く途中で千恵さんたちに会つだろうから、かなで兄さんが『会ったときに伝言を伝えてくれ』って、私に頼んだんです」

「伝言？」

「それは何？」

「『今日の格闘技訓練が中止になって、そのぶん急に座学の講義が実施されることになりました。』

だからすぐに、このビルの下層に下りて来て下さい」

…………だそうです」

「…………座学の講義？」

桜が何を言ったのかは、分かる。

『チーム・ベアー』の未成年メンバーの一部は（というか桜と綾乃以外の3人だが）、

先月から簡単な心理学と応急医術を学び始めている。

いずれウラ社会で暗躍するだろうという配慮に基づく、かなり重要な講義だ。

もっとも、重要であるがゆえに、教官役の幹部がかなり厳しいのだが。

「その講義、何時からあるの？」

「10時からだそうです」

千恵は腕時計を見た。

現在、……9時46分。

「……急がないとまずいんじゃないの？」

ベルモットのツツコミを聞く横、千恵は真っ青になった。

アジトのエレベーターは、今や、この階からかなり離れた屋上に
ある。

第2章 仲間 第4節（後書き）

～作者より～

お久しぶりです。

見ての通り、会話だらけの節になりました。
次の節でこの章は終わりです。

今回、水色少女の物語の主人公が出て来ました。
次回、未成年メンバー唯一の少年が登場します。

24日追記：本文に明らかに分かりにくい所があり、指摘があり
修正しました。

（見舞いに行く、という行動～の個所です）

第2章 仲間 第5節

座学の講習は、手ぶらで受けたりしない。教材が必要だ。そしてその教材は、千恵の部屋にある。

しかし、教材を取りに行き、なおかつ講習に遅刻せず出席するのはどう考えたって不可能だ。

教材を持って遅刻するか、手ぶらで時間通り出席するか。

……千恵が選んだのは後者で、そしてその後、とんでもない目にあった。

1月8日 午後8時

本来なら夕食を食べてるはずの時間帯、何も食べずに凍りついて
いる者達がいる。

『チーム・ベアー』、未成年メンバー3人だ。

「……で、講習はどうだったの？」

額に青筋浮かべた世話役、六鷹奏（むったかかなで21歳ちなみに独身）は、引きつった顔のまま千恵に問うた。

「最悪でした、かなで兄さん」

「どんな風に最悪だったの？」

これには、ルシндаが答えた。

「ボクは千恵ちゃんが教材持っていないことに気づいて、だから千恵ちゃんの教材も持って講習に行っていました」

「……それで？」

「でもアジトって広いから……、
ボクは教室の場所間違えて大幅に遅刻して、で、教室に着いた時、
教官にすごく怒られて」

「そりゃ怒るだろうね」

「しかもボクだけじゃなくて、ファー君も同じことを考えてました。
でもファー君は結果的に入れ違って、千恵ちゃんは手ぶら欠席、
ボクとファー君は遅刻で怒られて」

「……一応補足しておく、ファー君、というのは同じ『チーム・
ベアー』の仲間だ。」

本名、クリストファー・クライン、もうすぐ11歳。

銀髪碧眼の彼は、少々青ざめた顔でルシндаの横に座っている。

「教官、何て言ってた？」

これには、銀髪の彼が答える。

「あきれてました。」

それで、……『世話役は何やってんだー？』って

「なるほど」

世話役はとりあえず笑った。
そして早口で、

「なるほどよく分かったよ、教官が僕を呼び出して殴った理由が。
その時は何があったのか知らなかったけど君達が原因なんだね」

真顔に戻り、

「今日の夕飯は無しだね、うん、3人の分は。
それに、……便所行くととき以外は朝までここから出るな」

「「「……はい」」」

俗に説教部屋と呼ばれる空き部屋の畳の上で、正座した3人は縮こまって返答。

「あとで毛布を持ってくる。
今夜は3人ともここで寝てろ、……バカ共め」

言い残し、彼は部屋を去った。

第2章 仲間 第5節（後書き）

～作者より～

すいません、予定変更して、次の節でこの章は終わりです。

追記：クリストファー・クラインの年齢ミス、投稿後修正入れます。

第2章 仲間 最終節

1月8日 午後10時

「兄さん、ヒーターのない三畳間に3人押し込めて薄手の毛布3枚は、さすがに寒くないの？」

『チーム・ベアー』、六鷹綾乃と風代桜の部屋。
パジャマ姿の綾乃は眼帯を結びつつ、世話役に訊いた。

今は一月、夜はかなり冷える時期だ。

夕食を食べていない3人にとって、かなりつらい寒さだろう。

「……綾乃、元々の原因は、お前らがコルンさんの見舞いに行ったことだろ？」

そんなに心配するなら、お前もあの部屋で寝てみるか？」

「いや、……私まで怒られたら、一人だけ残された桜が寂しがるから。」

あの子、一人で寝ることが出来ないんだよ」

「ガキかあいつは」

「10歳のガキならギリギリ許されると思うけど？」

それに兄さんは、……あの子の母親守れなかったのに何言ってるの？」

「……何だと？」

世話役、六鷹奏は、自らの妹を睨みつける。

妹も隻眼で睨み返し、その瞬間、部屋にその桜が入ってきた。

六鷹兄妹の睨み合いを見て、彼女は部屋の入り口で硬直する。

一方、説教部屋。

明かりの落ちた三畳間、一人当たり薄い毛布1枚では、綾乃の予想通り寒い。

薄くてデカイ毛布なのがせめてもの救いだが、それにしたって寒い。

本日千恵は何回も戸惑い、あるいは凍りついたが、それとは別の意味の寒さ。

記録的な暖冬ならともかく、今年は普通の冬なのだ。

「ねえ、ファー君」

「……何ですか、千恵さん」

「こんなときに気が紛れるような面白い話、知ってる？」

「知りませんよ！」

千恵さんこそ何か知らないんですか？ 親から聞いた話とか」

「父さんはそんな話する人じゃないし、母さんは乳がんでもう亡^ない

し……、私は知らないよ。

2人の親は……」

千恵が訊く前、2人同時のツツコミが入った。

「「両方とも死んでます！」」

……そんなこんなで、夜は更けていく。

寒かったりイタかったり気まずかったりする夜は、仲間と共に過
ごしつつ、更けていく。

第2章 仲間 最終節（後書き）

（作者より）

この小説の投稿は、この節をもって休止させていただきます。
掲示板に書いたとおり、3章以降、いつになるかは分かりません。
受験勉強を終えて、出来るだけ早く戻ってきたいと思います。

実はこの後書き、書くの二回目です。

もっと長い裏話付きのを書いていたのに、最終話選択を忘れて全部消えました（汗）。

復帰してまずやるのは、消えてしまったこのキャラ命名裏話になる予定です。

追記：冒頭、日付と時間書き忘れて追加しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5737a/>

改版：黒髪少女の終末記～cross & end～

2010年10月10日01時04分発行